

フロイトの症例「ねずみ男」に関する考察（Ⅵ） —「診療録」と「公刊された論文」との対比—

鑑 幹八郎・佐藤 淳 一

まえおき

私たちはこれまで、フロイトの症例「ねずみ男」に関する考察を2003年から続けてきた（Ⅰ－Ⅴ、参考文献参照のこと）。本論文も同じく、診療録と公刊された論文との対比を行い、フロイトが論文を構成していく道筋を明確にしていくことを目的にしている。しかし、前回の「Ⅴ」の論文の後、今年まで4年の間隔があいてしまった。その点について、若干の説明をしておきたい。

私たちの研究はフロイトの症例「ねずみ男」の公刊された論文（1909）と偶然に発見されたフロイトの「ねずみ男の診療録」との間には大きな違いがあることを見出して、関心をもったのがきっかけであった。このような関心は私たちのみならず、多くの精神分析関係の研究者には共通してもったものであった。しかし、研究のレベルで見ると、このようなことに焦点を当てた研究は欧米を含めてこれまでのところほとんど出ていない。そこで研究の価値があるということを感じて取り組み始めた。

日本には、「診療録」の訳がなかったので、まず診療録の翻訳から取り掛かりながら、一方で公刊論文との比較研究をする予定で論文を発表することにした。後に示す独文と英訳文と仏訳文とを参照しながら、Ⅰ－Ⅴを発表した。その時点で北山修らのグループで診療録の翻訳が進んでいることを知った。そのため、翻訳の

出版を待ち、それから次の展開を考えようということにして、しばらく中止することにした。

翻訳は2006年に出版された。原本からの翻訳であり、さらに仏訳文の詳細な注も利用して載せられていた。また、症例「ねずみ男」に関する臨床的な考察も付け加えられていた。立派な仕事であった。これが出来ているのであれば、私たちの研究は必要ないだろうと思った。しかし、翻訳を詳細に読んでみると、仏訳文の注はすべて載せられていないこと、また診療録と公刊論文との対比という形で示されてはいないことがわかった。それで私たちの論文の意図つまり、「公刊論文と診療録との対比的な研究」はそのまま生きており、研究の続行に意味があるということを確認した。このような次第で、これからはさらに研究を続けることにして、ここに第Ⅵ報を出すことにした。

この対比の作業は公刊論文と診療録との比較検討を行うものであるが、それには二重の意味がある。まず、公刊論文と診療録との文字と文字の対比検討、そしてさらに、公刊論文にされたときに加えられた様々な変更があるのは、なぜかということ进行を明らかにすることである。

第2の側面は、フロイトの追加、削除、変更、ほのめかし、推測など、様々なものがある。これらがなぜなされたかはフロイトの意図を推測するという想像力を必要とする仕事になる。これはきわめて困難であろうが、できる限り事実に基づいて研究を進めたいと思っている。

1. 資料

症例「ねずみ男」の診療録のテキストには、「全集版」独文¹⁾、「ハウエルカ版」独文・仏訳²⁾、「標準版」英訳³⁾がある。「標準版」英訳は、「全集版」独文の英訳ではなく、1955年に Strachey, J. & Strachey, A. によってフロイト全集（標準版）の付録として訳出されたものであり、症例の記録としては初めて発表されたものである。「ハウエルカ版」は、その後1974年に Hawelka, E. R. によって訳出された独文・仏訳の症例の記録であり、手稿の余白や行間のメモや印まで忠実に再現され、膨大な仏語の注釈が付けられている。「全集版」独文は、手稿の転写されたものと「ハウエルカ版」との対照作業を通して、1987年に発表されている。

先に述べたように、本研究の開始当初は診療録の邦訳がなされていなかったため、「標準版」英訳の邦訳作業を試みていた。2006年に北山修（監訳）高橋義人（訳）によって「全集版」（独文）と「ハウエルカ版」（独文）（仏訳）を原典とする記録の邦訳が発表されたので、本稿より邦訳テキストとして準拠する。なお公刊された論文は、これまで通り、「強迫神経症の一症例に関する考察 小此木啓吾（訳）（1983）フロイト著作集9, 人文書院」を参照とした。

2. 「診療録」と「公刊された論文」の対応表

セッション日ごとに「診療録」の内容、それと対応する「公刊された論文」の内容、両者の内容の比較、内容の主たるテーマを表に示した。比較作業については、次のように分類した。セッションの内容が公刊された論文にほぼ同様に扱われているものを「同様」、セッションの内容が公刊された論文にほぼ扱われていない場合を

「省略」、セッションの内容が公刊された論文に扱われているものの、明らかにセッションとは異なる内容に変更されている場合を「変更」、セッションの内容が公刊された論文に扱われていないものの、明らかにセッションでみられない内容が追加されている場合を「追加」、セッションの内容が公刊された論文に明確に扱われていないものの一部示唆されている場合を「示唆」とした。なおセッションの内容の後には、それぞれ対応する邦訳の該当ページを「著・ページ数」として示している。

今回の論文で扱ったセッションはこれまで検討した続きで、第30セッションから第39セッションまでである。

3. 考察

第30～39セッションの内容と公刊された論文との対応関係を検討してみたい⁴⁾。セッションの内容の多くは公刊された論文で省略されていたが、主として次の点であった。

第1に、母親に関する内容が省略されていた。たとえば、「治療費と母親」（#30）、「母親の分泌物」（#33）、「母親への思いやりと敵対感情」（#35）、「母親への軽蔑とお金」「母親の家族」（#36）、「母親との同一化」「母親が父親を非難する夢」（#37）などである。患者は母親に対して嫌悪感、軽蔑視、敵対感情などを示す一方で、思いやりを見せたり同一化して喋ったり父親を非難するなど、アンビバレンツな関係であったことがうかがわれる。こうした母親に関する話題が論文で省略されている点は先の研究でも指摘した（佐藤・鑑, 2003, 2004）。省略された理由として、小此木（1977）はフロイトが患者の母親への憎しみを否認したのか、さらにはフロイト自身もまた母親への憎しみを否認していたのではないかと推測している。あるいは

表1 第30セッション (1907年12月8日)

診療録	公開された論文	比較	テーマ
<p>一週間で大きな変化を見せる。お針子とデートしたせいで大いに昂揚感を味わいはした。もつともこのデートの結末は性急なセックスだった。こんなこともあって、間もなくふき込みむようになり、ついには治療中に転移を示すようになる。その子との場面で、ねずみ男の警告が頭をかすめ、徒味にももらったタバコをくれからとりだして巻煙草を巻くとき、お針子の警告した指を使わないよう心掛けてきたのに、どうしてもその気持ちに逆らってしまうのだという。(記.99)</p>	<p>父親の品な示唆(彼は結婚前下士官だったことがあり、率直な軍人気質を持ち、軍人時代の生活の名残としてかなり荒っぽい口ぶりを示す傾向があった。(著.247)</p>	<p>省略</p>	<p>お針子との性交とねずみ男</p>
<p>父親について、そのがさつさについての詳細。父のことを「下品な奴」と母親は呼んでいた。いつも平気でおならをしていたからである。(記.99)</p> <p>治療における転移をもたらしただけで、その一つとして、彼がその重要性に気づいていないとは思えないある誘惑を語った話がある。彼がドクターになって間もないころであった。そのとき彼は博士になって数カ月しかたっていないはずだ。ザポルスキー一家のチャタリングな娘—今は17歳になった—と結婚させようとする。母親の旧来の計画に結びつくものであった。このことごとから逃れるために彼は病気のなかでに迷ったわけだが、この逃避への道を切り開いたのは、姉と妹のどっちを探るかという幼児期からの選択であり、父親の結婚にまつわる話への退行である。ただし彼にその自覚はない。(記.99)</p>	<p>父親の死後、ある日母は、息子に次のような話をした。今母と金持ちの親戚たちとの間で、彼の将来のことが話題になっている。そして、親戚の一人は、もし彼が学業を終えたなら自分の娘をお嫁にやってもいい、こうして会社と縁ができれば彼の職業にも輝かしい見通しが開けるだろう、と話した。このような家族たちの計画を聞いた彼の心中には、自分には貧しい恋人に忠実でいるべきか、それとも父の敵を踏んで、自分に定められた美しい金持ちの、家柄の良い少女を妻にした方がよいか、と言う精神的葛藤が燃え上がった。そして、本来は、自分の愛情とその死後になってもなお自分に影響を残している父の意志との間の闘いであったところのこの葛藤を、彼は発病という形で解決したのである。もつと正確にいえば、彼はその葛藤を現実的に解決せねばならないという課題に直面する状況を、発病によって回避していったということが出来る。(著.246)</p> <p>注) われわれはこのような病気の逃避は、父との同一視の機制によってはじめて可能になったと考えることができる。この同一視こそ、幼児期の残存物への感情の退行を引き起こしたのである。(著.246)</p>	<p>示唆</p>	<p>父親のがさつさ</p>
<p>父親はつねづね自分に関する求婚話をユーマアたつぷりに語っていた。母親は、「あんたは以前に肉屋の娘に言い寄っていたじゃないか」と事あるたびに父親をからかっていた。「もしかして父親はザポルスキー一家とで利得を確保しようとし、そのためにかつての恋人を捨てたのではないか」と思うと、彼にはどうにも我慢できなかった。(記.99)</p>	<p>彼の母は、遠縁にあたる富裕な家庭に引き取られて育った。その家族は、大会社を経営していた。彼の父は結婚と同時にこの会社に就職したが、実のところ自分の妻のお蔭でかなり安定した地位に昇ることができた。こうして彼の両親は、人もうらやむような幸せな生活を送っていたが、この両親の間に交わされた冗談話から、ふとこの息子は、自分の父が母を知るしばらく前に、ある身分の低い家庭の、美しいが貧しい少女に言い寄ったことがあったという事実を知ってしまった。(著.245-6)</p>	<p>示唆</p>	<p>父親の求婚話</p>

<p>患者の陰性転移</p>	<p>フロイトの妻と娘への転移空想</p>	<p>示唆</p>	<p>われわれが一連の激しい抵抗と手厳しい雑言を、忍びに忍んで克服した後、彼は空想的な転移と当時の現実状況とのあいだの完全な類似性という、どうしても信じざるを得ないような事実を、もはや否定することができなくなった。(著.247)</p>
<p>省略</p>	<p>—</p>	<p>同様追加 (フロイトの誇張した解釈=汚物のしみが大便の塊)</p>	<p>「先生(分析医)の娘さんが目の前にいました。ところが娘さんは、2つの目を持つ代わりに、2つの大便の塊を付けています。夢の言葉がわかる人には、この翻訳は容易であるが、それは彼女の美しい目のためではなく、彼女のお金(特参金)のためです」と。(著.246-7)</p>
<p>省略</p>	<p>—</p>	<p>治療費と母親</p>	<p>彼は結婚前下士官だったことがあり、率直な軍人氣質を持ち、軍人時代の名残としてかなり荒っぽい口のきき方をする傾向があった。(著.247)</p>
<p>示唆</p>	<p>父親の性格</p>	<p>示唆 (患者の見方と客観的描述、しかも肯定的)</p>	<p>彼の墓石にも故人の生前の徳を刻みつけるのが習わしであるが、彼の長所は、率直さのあるユーモアと周囲の人々に対する親切さであった。(著.247)</p> <p>しかし子供たちが成長すると、彼は他の父親たちと違って、役しがない権威の座に就こうとせず、むしろ気立てのよい率直な態度で、自分の個人生活の小さな失敗や誤りをもそのまま子どもたちには知らせていた。(著.247)</p>

表2 第31セッション (1907年12月9日)

<p>診療録</p>	<p>比較</p>	<p>テーマ</p>
<p>あのお針子に夢中になっているせいか、快活で一顧舌だー (記.103)</p>	<p>省略</p>	<p>お針子との関係 造語WLKをともなった夢 (暗号解説はやや強引)</p>

彼は私に対してかなぐりさらせられておき、それは、もっぱら耐えがたい苦痛とともに吐き出される罵りとなってあらわられる。私が鼻をほじくると言って非難し、握手しようともしない。こんな汚い陰野郎には徹底的に作法をたたきこんでやらねばならぬと思ってしまう。私が彼に葉書を送ったことや、そこに「親愛なる」と記したことを、あまりに馴れ馴れしい振る舞いだとみなしている。(記.99-100)

どうやら彼は、従妹のかわりに私の娘と結婚したいという空想上の誘惑に抵抗しているだけでなく、私の妻や娘を侮辱したいという思いとも闘っているようだ。転移がいわんとしていることを露骨に表現すれば、「フロイト夫人よ、おれの尻をなめろ」ということだ(上流家庭に対する反感)(記.100)

また彼は、私の娘の両眼が二つの汚物のしみに置き替わっている姿を見ている時もある。ということばかり、彼女の眼にはなく、彼女の税金に魅せられていたというわけだ。リッツィーはとりわけ美しい眼をしているのである。(記.100-1)

初めの頃には、彼が前の月に16フロロリンどころか30フロロリンも使ってしまっただと嘆く母親に対して勇ましく抵抗していたのに、ねずみに母親のことを匂わせるような部分はない。ここには、明らかに最も強い抵抗が母親に由来しているという事情がある。(記.101)

ねずみ Ratten と分刺払い Raten とを等置することで、彼は同時に父親のことをあてがって楽しんでいられる。父親はあるとき友人に「わたしはただの素人だ」というところを「ただの煮え切らないややつだ」と言ったらしく、これを聞いたときは、父親は無教養のすべてを表しているように、恥ずかしくて仕方がなかったであろう。父親は時おり儼然とすよようと思いつく。母親は生活信条として儼然と心停している。父親は最初の間借り人の家を出て来た。母親は生活信条として儼然と心停している。父親は最初の間借り人の家を父親と同一視するところから考えている。父親は最初の間借り人—父親はこの間借り人の家を立て替えてやった—に対して、他の人に対して、同じようにわけへだてのない態度で接していた。そもそも父親は実際まことにあけすけでともユーモアのある男であった。普通なら父親のこうした点は高く評価してよいとランツァーは考えている。それでもやはり、あまりに洗練された彼の繊細な感性からして、父親の兵隊根性丸出しの単純さを恥ずかしく思っていることは言うまでもない。(記.101-2)

表3 第32セッション (1907年12月10日)

診療録	公刊された論文	比較	テーマ
<p>彼は夢の全貌を打ち明けてはくれなかったものの、自分ではその内容を全く理解していない。他方で、WLKについてはいくつかのことを語っている。私の推測するに、WC.はトイ私のことなのだろうが、確証はない。これにひきかえ、Wというのには、姉妹の誰かが歌う「私の心は悲しみでいっぱいだ」という歌で、これを聞くと彼はとてども滑稽に感じて、どうしてもラテン字体の大文字のWが浮かんできましてしまうそうである。(記.104)</p> <p>強迫に対する彼の防衛の常とう句は、「Aber」という語であり、最近では(治療を受けるようになってからか?)「Aber」を強調して発音するという。黙音のeでは、外からの侵入してくる者に対して身を守るのに十分ではないので、にせのアクセントでこの音節を強めれば大丈夫だろうと思ったとという。ところで、今ふと思いついたことがあると彼はいう。「Aber」に欠けていたwがWLKという言葉にあったところからすると、この「Aber」は「Abwehr」を意味しているのではないかと、ということである。(記.104)</p>	<p>—</p> <p>われわれの患者は、防衛方式として、とっさに「しかし」aberという言葉は早口に発音し、それが同時に手で否定する身振りをした。ある時彼は、この方式が最近変わって、自分自身はもはやaber(アーベル)といわずにaber(アペール)と言うと語ったのである。この方式の変化の理由を訊ねられて彼は、第二音節の無音のeに、何か自分にとつて外来的なものや反対のものの侵入してくる不安を感じるからであって、どうしてもこの不安が防げない、だから自分はこの不安を防ぐためにeにアクセントを付ける決心をしたのだと述べた。しかし完全に強迫神経症の様式に組み込まれたこの説明も、実は不十分なものであることがわかった。それはせいぜい、そういう理屈付けの承認をわれわれに求めるだけのものでは、後者の「しかし(aber)」は、彼が精神分析に関する理論的な話題のうちから学んだ言葉である防衛Abwehrに、わざわざ釣り合わせてこしらえたものである。(著.264)</p>	<p>省略 (夢へのこだわり、=現実的)</p>	<p>造語WLKをともなった夢</p>
<p>彼の常套句に「Gleisamen」という言葉がある。この言葉は、彼が幸せな状態にいと感じたとき、このまま変わらないうちに思っているものすべてを呪縛するために用いられてきたもので、もうずいぶん長いあいだ彼に立って立っているのだが、しかし、敵対する可能性、つまりは反対のものに転化する可能性を持っているという。そんなわけで、彼はこの言葉をもっと短縮しようとして一理由は不明だが「Wie」という短い言葉で置き換えたのだそうである。(記.104)</p>	<p>彼女の名前には一つのSが含まれていた。彼はこのSを呪文の最後すなわち打ち付け足のAmenをすぐ前に置いた。したがって彼は—こう言うことで差支えなければ—彼の精液Samenを、愛している恋人につけたことにならるのである。すなわち観念の中で、彼女自身を相手に手淫していたわけである。(著.264-5)</p>	<p>示唆 省略</p>	<p>呪文の短縮</p>
<p>治療中の転移はかなり緩和してきている。私の娘に出くわすのではないかとひどく不安を感じているが。(記.105)</p> <p>彼は何とも無邪気なことに、自分の鞆丸の一つが身体の中に入ってしまったまますと降りてこない、と語る。ただし性的能力は極めて良好だとのことである。彼は夢のなかで、ある隊長に挨拶された。その男は右側にだけ階級章を付けていて、しかもその三つ星の一つが垂れ下がっていた。これについては、いとこの手術との類似性。(記.105)</p>	<p>—</p> <p>—</p>	<p>省略</p>	<p>造語WLKの意味 転移空想 鞆丸の停留と大尉の夢</p>

表4 第33セッション (1907年12月12日)

診療録	公開された論文	比較	テーマ
<p>彼の汚らわしい転移は依然として続いており、だんだんふくらんできている。彼が嗅覚の鋭い男だということがわかってくる。思春期の頃には、人がどんな服を着ているかが匂いで識別できたらしい。家族の匂いなるものがあるのだという。しかも彼は、女性の髪の毛の匂いを嗅ぐだけで快楽を感じたそうである。(記.106)</p>	<p>私は、われわれの患者が嗅覚の鈍敏な男であることを知ったが、彼の主張するところによらると、幼児期の彼は、犬のように人間一人一人を嗅ぎ分けたということである。大人になってからでさえも、嗅覚による知覚は他の全ての知覚に比べて遙かに多くのことを知らせてくれたそうである。(著.281)</p>	<p>同様省略 (女性の髪の毛の匂いへの快楽)(女性との一体化願望)</p>	<p>嗅覚の鋭敏さ</p>
<p>つづいて明らかになってきたことがある。彼の内には自分では意識していない格闘があり、これが彼に無意識な格闘の転移を自分のために造り出したのである。そうしていま彼は、このお針子と、裕福な上流階級たるわが娘とを競わせているのである。(記.106)</p> <p>勢力は驚くべきものである。(記.106)</p>	<p>-</p>	<p>省略 (愛情と生理的レベルでの性の離れ?)</p>	<p>従妹からお針子への愛情の変遷</p>
<p>彼は今日、大胆にも自分の母親を激しく罵った。ずいぶん昔の記憶らしいが、ソファアに横たわっていた母親が立ち上がったとき、彼女がスカートの下から何か黄色いものを引っ張り出し、それを椅子の上に置いた。彼がそれに触ろうとして、あまりの気味の悪さに縮毛立った。後になって、それは彼の記憶の中で分泌物となった。このことから、私の家族の女性全員がいろいろな種類のむかむかするほど汚い分泌物の海の中で窒息している、という内容の転移が生じているのである。女性はすべて不快な分泌物をもっているのだと彼は思い込んでいた。で、自分の二人の愛人にはそうしたものが無いのを発見してとても驚いた。母親は下腹部の病を患っていた。そして今は生殖器から嫌な匂いを放っている。これは彼にしては耐えがたく、臭うけれども、そんなにひどい匂いには風呂に入らないうちに洗い流す。これをお針子と、裕福な上流階級たるわが娘とを競わせているのである。(記.106)</p>	<p>-</p>	<p>省略</p>	<p>母親の分泌物と女性への不快な転移空想</p>
<p>彼は子供に関する二つのすてきな話をする。一つは、サンタクロースが大好きな5つか6つかの少女の話である。少女が薄眼を開けて眠ったふりをしている、パパとママが林檎と梨を靴や靴下に詰め込んでいるの見える。翌朝、彼女は、住み込みの女性家庭教師に、「サンタクロースなんていないよ。パパとママがサンタをやっていたんだ。もうそんなもの全然信じていないもん。コウノトリだって信じていないもん。だってそれパパとママがやっていたんだから」と言う。(記.106)</p>	<p>-</p>	<p>省略 (外的な観察の正確さ)</p>	<p>子どもの脱錯覚の話</p>
<p>もう一つは、7歳になる彼の甥の話である。少年はとても臆病で、犬をこわがっていた。あるとき彼の父親が少年を叱って「2匹の犬が来たらどうする?」と言うと、少年は「2匹ならこわくないよ。だって、それからお互にお尻をずつつつと嗅いでいるから、その間に逃げちゃえばいいんだ」と応える。(記.106)</p>	<p>-</p>	<p>省略 (外的な観察の正確さ)</p>	<p>子どもの性的な話</p>

表5 第34セッション (1907年12月14日)

診療録	公開された論文	比較	テーマ
<p>女の子との仲は順調である。彼女の飾り気のなさが気に入っている。セックスでは精力がみなぎっている。(記.108)</p>	<p>-</p>	<p>省略</p>	<p>お針子との関係</p>

<p>その一方で、軽度の強迫観念を訴える。そこから次のことが明らかとなる。すなわち、母親に 対する敵対的感情の流れが存在していることーちなみに彼はいま母親に対して過剰なまでの思 いやりを持って接しているー、この敵対的感情の流れは、かつて母親がしつけの時に口やかま しく、とりわけ彼の不潔さに関して叱責していた事実に由来すること。出た話は、母親がげづ おをする、12歳のときに、気持ち悪くてものが食べられないと文句をいったこと。(記.108)</p>	<p>-</p>	<p>省略 (母とのアアンピ ヴァレントの関 係)</p>	<p>母親への思い やりと敵対的 感情</p>
--	----------	---	---------------------------------

表6 第35セッション (1907年12月16日)

<p>診察録</p>	<p>公開された論文</p>	<p>比較</p>	<p>テーマ</p>
<p>お針子と一緒にいると、「セックスするたびに、従妹にねずみを1匹と考えてしまう。これは、 ねずみは何か数えられるものである、ということを示している。この文は、好意と敵意とい う二つの感情の流れの妥協として成立しているのである。そうであるなら、a) お針子との 毎回のセックスはそのつと従妹とセックスする可能性をもたらし、b) 毎回 のセックスはそのつと従妹の意に反して行われ、従妹を怒らせるはずのものである。 こうしたイメージは、明瞭で自覚的な観念・空想・譫妄・強迫観念・転移などから組み立て られている。(記.109)</p> <p>ねずみの話については、「ぞっとするような」体験がある。まだ彼が発病する前、鼠のよう な動物が父親の墓のそばを走りすぎるのを見たことがあった。これはしばしばそこに出没す る野イタチの一種だった。どうやらこの動物は父親のところへ食事をしてやってくるらしい、 と彼は推測した。死後の生についての彼の観念は、無意識の内部では、古代エジプト人と同 じように一貫して唯物論的である。(記.109)</p>	<p>-</p> <p>かつて、父の墓に詣でたとき、彼は大きな動物がお墓の丘 のかたわらを走り過ぎるのを見たことがあった。彼は、そ れが鼠だと思った。彼は、その動物が父の墓から飛び出し てきたのだ、ちよと父の死体を食いあさってききたところ だと思った。鼠という表象から切り離すことのできないも のは、この動物が鋭い歯でものを噛み、食いちぎるとい う習性である。(著.258)</p>	<p>省略</p> <p>同様 変更 (フロイトの想 像力の産物：ネ グティヴィメイ ジ＝食いちぎる など)</p> <p>省略 (幻覚の発生と現 実経験との関連)</p>	<p>お針子との性 交とねずみイ メージ</p> <p>父親の墓とね ずみのような 動物</p> <p>ねずみに関す る幻覚</p>
<p>これに関連して、ネメチエック大尉からねずみ話を聞かされたあとで生じた幻覚がある。あ たかも土中に鼠がいるかのようかのように彼の前で土が盛り上がる、という幻覚である。彼はこれ を何かの前兆とみなした。彼によると、こんな風に関連しているとは思ってもみなかったと いう。(記.109)</p>	<p>-</p>	<p>省略</p>	<p>ねずみに関す る幻覚</p>

表7 第36セッション (1907年12月19日)

<p>診察録</p>	<p>公開された論文</p>	<p>比較</p>	<p>テーマ</p>
<p>彼の吝嗇が明らかになる。父親が自分の愛する人を捨てて母親と結婚したのは、物質的な利 得が目当てだったからだと確信している。この確信の拠りどころは、結婚持参金よりも母親 とザボルスキーケとの縁故関係がもたらすコネの方が大事だったのだ、という母親の話にあ るのかもしれないが、ともあれ、この確信と、軍隊時代における父親の窮乏の記憶があいまっ て、人を犯罪に走らせるような貧困を彼は嫌悪するようになる。(記.110)</p>	<p>彼の母親は、遠い親戚の子が預けられる形で、大きな工業 企業を経営する裕福な一家で育てられた。彼の父親は、結 婚と同時にこの会社で働くようになった。そのように、ま さに結婚相手を選んだことにより、大妻裕福になつたの である。素晴らしい結婚生活を送っている両親の間で交わ された冷やかかしから、息子は、つましい一家の負いけれ れが前史となった。(著.224)</p>	<p>同様</p>	<p>両親の結婚に まつわる背景</p>

こんなわけで、彼は母親を軽蔑していれば満足なのである。かくして、愛する人を裏切っ はならず、と彼は俟約を始める。しかも自分の全財産を母親に譲り渡してしまう。母親から は何のほども受けたくないからだ。いっさいのお金はともと母親のものなのであり、 そんなお金では祝福は得られないのだ。(記.110)	-	省略 (なぜ、怒り が母にいくの か?)	母親への軽蔑 とお金
自分の資質の悪い面はすべて母親から受け継いだものだ、と彼は言う。母方の祖父は粗暴な 男で、自分の妻を虐待していた。彼の兄弟姉妹はみな、あしき子どもから立派な真人間に大 きく変貌をとげた。ただ兄弟の一人は大して変わらせず、成金になったにすぎない。(記.110)	-	省略 (父の価値の講売 り? 現実には肯定 的出来事が多い)	母親の家族

表8 第37セッション (1907年12月21日)

診療録	公開された論文	比較	テーマ
その振る舞いや治療中の転移の面で、母親に自らを同一化している。振る舞いについてい ば、一日中くだらないおしゃべりする、わざわざ兄弟姉妹の誰に対しても嫌なことを言 うとする、叔母や従妹について辛辣な批評をする、などがある。転移に関しては、私が何か 述べれば「わかりません」と言っやろう、と思っやろう、と思っ気持ちがある。考えている内容は、 「Parehに20クロローネで十分だ」など、その他にもいろいろある。同一化のこのよような構造 を彼も認め、その証拠として、従妹の家族に対しても母親と同じよような言葉遣いをしてしま うという点を挙げる。おそらく彼は、従妹の家族に対しても母親と自分を同一視しており、 このよようなかたちで両親の反目と自分を自分の内部で続行しているのだらう。(記.111)	-	省略	母親との同一 化
彼が持ちだす(むかし見た)ある夢では、父親を嫌悪する理由として、彼の理由が母親のそ れに擬せられて語られる。「父が帰ってきた。だからと言っ彼は全く不審に思わない(願 望の強さ)。彼はある意味で大喜びしているのだ。母が非難めいた口調で「ハイソリヒ、 どうしてずと連絡してくれなかったの?」と言っ。彼は“これで一人分の家計費が増えた のだから、なんといってもこれからは節約しなければならなくなる”と思っ」。彼のこの考 えは、自分が産まれたときに-新しく子供が産まれるといっつもそうだったか-父親が嘆いて いたといっ話を聞かされたことへの復讐である。(記.111)	-	省略	父親を非難す る母親の夢
この背景には、次のよような別の事情がある。父親は人に頼られるのが好きで、まるで自分の力 を乱用しよようとするかのように頼みごとを喜んで引き受ける男だった。もっとも実のところは、 すべてを動かしているのは自分なのだ、といっ喜びを満喫してただただなのかもしれない。母 親の発言は、彼女が語ったある話と関連している。彼女が田舎に行ったとき、父親がめつ たに手紙をよこさなかったんで、ウィーンに戻っ父親を探し回ったことがある、といっ話で ある。要するに彼女は、自分が受けたひどい扱いへの不満を訴えたいわけである。(記.111)	-	省略	父親の自分勝 手な性格に対 する母親の不 満

表9 第38セッション (1907年12月23日)

診療録	公開された論文	比較	テーマ
彼は、父親に似た性格の無骨で誠実な男、St.博士がつい最近発病したことによりシヨックを受 けている。自分の父親が病氣だった時と同じよようなつらいつらい思いを味わっている。ちなみに病 は同じ肺気腫である。(記.112)	-	省略	家庭医 St. 博 士の病氣

<p>ところで、彼の嫉妬は純粋とはいえず、復讐心が混じっている。これについては、St. がもう死んでいるという幻想にとらわれることがある点からして、彼も自覚している。仕事から引退して休息をとるよう博士が父親に積極的に勧めなかつたことで、彼の家族は博士を長らく非難してきたが、彼の復讐心はここに由来するのかもしれない。ねずみ男による制裁が博士にも及ぶことになる。(記.112)</p>	<p>-</p>	<p>省略</p>	<p>家庭医 St. 博士への復讐心</p>
<p>この話の最中に、彼はあることをふと思ひ出す。死の数日前、博士がこんなことを語ったというのである。すなわち、博士自身が病気に罹っており、どう見ても手の施しようがないのでクワイスラー博士に治療を任せようとしているが、親友だったので身につまされる思いだ、と。(記.112)</p> <p>これを聞いたとき、彼は「ねずみ男たちは沈む船を見捨てるのだ」と思った。-彼は、自分が望めば St. は死ぬ、自分が St. を生かしてやっていると考えている。つまり、自分は全能だという観念である。事実、彼は自分の願望の力で従妹を生き永くさせようとしてやつたことら二度あると思う。一度は彼女が不眠症にかかっていた去年のことと、彼が一晩中眠らなずにいると、実際に彼女はそその夜初めてぐっすり眠れたことである。もう一度は従妹が発作を繰り返していたときのことと、彼女が気絶しそうになるたびに、彼女の関心を引くような言葉を口にしておき、気をたしかにさせておくことができたことである。(記.112)</p>	<p>-</p>	<p>省略</p>	<p>家庭医 St. 博士による父親の治療 従妹への看病と患者の全能感</p>
<p>彼の全能の観念はどこから来るのか。私に思いあたるのは、初めての身内の不幸、つまり、カミーラの死である。これについて、彼の中に三つの記憶が存在する。まず最初の記憶だが、彼はこの記憶に訂正を加え、敷衍して次のように述べる。彼は、カミーラがベッドに連れていかれる様子を見ている。ただしパパによって連れていかれたわけではない。なおこの出来事は、彼女の病気が判明する以前の出来事である。なぜなら、パパが彼女を叱りつけ、彼女が両親のベッドから引き離されるからである。実際、カミーラは随分前から疲労を訴えていたのに、誰も気にとめなかった。St. 博士が彼女を診察したとき、博士は着せさせた。彼は悪性腫瘍(?)と診断した。事実のちに彼女はその病のために死んだ。ところで、その死に際して彼がどのような罪悪感を感じたかという可能性を私が論じている最中、彼はこれに関連して別の話題を口にす。(記.112-3)</p>	<p>彼が3歳から4歳の間に起こった出来事であった姉の死は、彼のさまざまな空想中で大きな役割を演じ、その頃の幼い的な悪行と内的に密接に関連していた。(著.272)</p>	<p>省略 示唆</p>	<p>亡き姉カミーラの死の記憶</p>
<p>それ以前に全能の観念についての記憶が彼にないという点で、この話題もまた重要である。彼が20歳の時、ランツァ一家は一人のお針子を雇い入れた。彼はお針子に何度もいいよつたのだが、しかし本当は彼女を好んでいたわけではない。そのお針子はえり好みも激しく、相手に過剰な愛着を求めた上で、自分は愛されていないと不平を訴える女性だったからである。お針子はあかさまに「好きだ」と彼が明言するよう挑発したが、彼はそれをきっぱりと退けたため、自暴自棄になってしまった。数週間後、彼女は窓から飛び降りた。彼がそのお針子と関係をもっていたら、彼女はそんなことはしなかったであろう。このように、誰かを幸せにする力を持っている者であれば、愛を聞きいれたいたり撥ねつたりすることでの全能を発揮するのである。(記.113)</p>	<p>もう一つの体験は、愛に飢えたハイ・ミスに関するものである。その夫人は彼に大変好意を寄せ、一度は、「私を愛することができないか」と彼に直に聞いたことさえあった。彼は逃げ口を言った。二、三日後彼は、その夫人が窓から落ちたことを聞いた。そこで初めて彼は自分を責め、「もし自分が彼女を愛してあげさえしたら、彼女を生きたままならささせることができたのに」と自分に言い聞かせた。そんな具合で彼は、自分の愛と憎しみの全能を確信するに至った。(著.271)</p>	<p>同様 変更 (ランツァ一家のお針子→ハイ・ミス)</p>	<p>お針子の自殺と患者の全能感</p>
<p>その翌日になって-彼の言うには-以上上のことが明らかになったあたでも後悔を感じていない自分に驚いているが、しかしともかく後悔の念はすであつたと思う(素晴らしい!)。(記.113)</p>	<p>-</p>	<p>省略 (罪悪感のテーマ)</p>	<p>お針子への後悔の念</p>

<p>春には、すきすきしい画責 (何に由来するか?)。話の詳細からその説明はつく。彼は突然ひざまずき、信仰心を引張り出して、あの世と魂の不死を信じようとい心に決めた。つまり、何を意味しているのかといえは、徒弟を「完女」呼ばわりした後で、キリスト教に目覚め、ウンターラッハの教会に通うようになった、ということである。父親は決して洗礼を受けようとはしなかったが、祖先がこのいまましいおとめを彼から取り除いてくれなかったことを大変遺憾に思っていた。彼がキリスト教徒になるつもりなら、邪魔立てするつもりはない、と父親は彼によく言っていた。</p> <p>「すると、そのころ徒弟のライバルになるようなキリスト教徒の少女がいたのでは?」</p> <p>「いいえ、いませんでした。」</p>	<p>画責の念と信仰への目覚め (ユダヤ教めなの?)</p>
<p>ザボルスキー家の結婚計画、自分の将来像と従弟からの侮辱</p>	<p>省略</p>
<p>省略</p>	<p>省略</p>
<p>同様</p>	<p>夜中の試験勉強と亡き父親の再来</p>
<p>父について空想に耽ることもしばしばであった。それゆえ、扉がトントんとノックされると、「おやお父さんが来たな」と思ったり、どこかの部屋へはいるとき、そこに父がいないかと期待する、というようないろいろなことがしばしばあった。死の事実を全然忘れたわけではないにしても、そういう亡霊出現の期待はけっこう恐ろしいものである。(著、227)</p> <p>彼が試験勉強中に、父が実はまだ死んでいないと、いつかここにやってくるかもしれないという彼の好きな空想に耽っていたときの、彼の奇妙な振る舞いも同じような関係から理解することができている。夜の12時と1時の間に彼は勉強を中断して、玄関へ通ずるドアを、まるで父がその前に立っているかのように開けてみて、また戻ってきてから、次の間の鏡の前で自分のベニスを露出して眺めたのであった。この気狂いじみた振る舞いは、彼が草木も眠る丑三つ時という幽霊の出る時刻に本当は死んでいない父の訪問を期待するかのよりに振る舞った、という事実を考えてみるとよく理解される。父が生きていた時代には、むしろ父が時々頭を痛めたほどの急げ学生生だった。ところが今は、もし父が幽霊になっても現われ勉強中の彼に行き会ったらさぞ喜ぶだろう。しかし父は、彼のその行為の裏面にある別な行為を反抗していたのである。(著、250)</p>	<p>父について空想に耽ることもしばしばであった。それゆえ、扉がトントんとノックされると、「おやお父さんが来たな」と思ったり、どこかの部屋へはいるとき、そこに父がいないかと期待する、というようないろいろなことがしばしばあった。死の事実を全然忘れたわけではないにしても、そういう亡霊出現の期待はけっこう恐ろしいものである。(著、227)</p> <p>彼が試験勉強中に、父が実はまだ死んでいないと、いつかここにやってくるかもしれないという彼の好きな空想に耽っていたときの、彼の奇妙な振る舞いも同じような関係から理解することができている。夜の12時と1時の間に彼は勉強を中断して、玄関へ通ずるドアを、まるで父がその前に立っているかのように開けてみて、また戻ってきてから、次の間の鏡の前で自分のベニスを露出して眺めたのであった。この気狂いじみた振る舞いは、彼が草木も眠る丑三つ時という幽霊の出る時刻に本当は死んでいない父の訪問を期待するかのよりに振る舞った、という事実を考えてみるとよく理解される。父が生きていた時代には、むしろ父が時々頭を痛めたほどの急げ学生生だった。ところが今は、もし父が幽霊になっても現われ勉強中の彼に行き会ったらさぞ喜ぶだろう。しかし父は、彼のその行為の裏面にある別な行為を反抗していたのである。(著、250)</p>

<p>田舎に旅立つ前の晩、つまり6月の初めか中旬、コンリートと一緒に帰宅した従妹に旅立ちのあいさつを告げたとき、彼は従妹に無視されたと感じた。(記.118)</p>	<p>従妹との離隔</p>
<p>彼が夏前ヴィーンで彼女と別れた時、彼女が語ったある言葉を、彼は彼女が属する交際範囲から彼を遠ざけたがっているのだと解釈した。そしてそれを非常に悲しく思った。(著.239)</p>	<p>示唆 省略</p>
<p>ウンターラッパに滞在していた最初の数週間、風呂場の脱衣場の壁の割れ目から向こうを除くと、幼い少女の裸が見えた。覗き見されていると知ったら彼女はどんな気持ちになるだろう、と自責の念に苦しめられた。彼にしてはまともな話だったが、これにくわれたせい、他にあった目下の大事な話題がみんなさき消されてしまった。(記.118)</p>	<p>少女への覗きと自責の念</p>

本症例をエディプス理論から考察しようとしたため、論文化の際にあえて扱わなかったのかもしれない。

第2に、お針子（定期的な性的関係を持った女性）や従妹（恋人）に関する内容が省略されている。たとえば、「お針子との関係」(#31、#34)、「従妹からお針子への愛情の変遷」(#33)、「お針子との性交とねずみ」(#30、#35)などである。こうした患者の女性関係に関するテーマが省略されている点は先の研究でも指摘した(佐藤・鏞、2004a, 2004b)。扱わなかった理由として、症例理解に直接つながらないテーマと判断されたのか、あるいはプライバシーに配慮したのかなどが考えられる。

第3に、患者の報告した夢が省略されている。たとえば、「造語 WLK を伴った夢」(#31、#32)、「大尉の夢」(#32)、「父親を非難する母親の夢」(#37)などである。夢が省略されているのは、先の研究においても指摘した(佐藤・鏞、2004b；鏞・佐藤、2005b)。

第4に、性交とねずみのイメージが省略されている。たとえば「お針子との性交とねずみイメージ」(#35)は重要なテーマであると思うが、これを論文で扱うと、大尉から聞かされた残酷なねずみ刑の話が背景に退いてしまうことも考えられる。

第5に、自殺観念や自責の念が省略されている。たとえば、「お針子への後悔の念」「自殺と死の観念」「湖に飛び込む自殺観念」(#38)、「試験の受験と自責の念」「呵責の念と信仰への目覚め」「少女への覗きと自責の念」(#39)である。とくに#38のお針子の自殺のエピソードについては、公刊された論文では強迫神経症者の愛と憎しみの全能感として取り上げられているものの、罪悪感の側面は扱われていない。

こうした省略点に対して、公刊された論文でも同様に取りあげられていたり示唆されている

ものとして、父親に関するテーマがある。たとえば、「父親のがさつさ」「父親の求婚話」「父親の性格」(#30)、「父親の墓とねずみのような動物」(#35)、「両親の結婚に至る背景」「夜の試験勉強と亡き父親の再来の空想」(#39)などである。両親の結婚話については、父親の結婚相手の選択問題が患者にも同じように影響を与え、発病によってその葛藤から免れているという理解がなされている。また、患者が夜中試験勉強をしているときに亡き父親が再来するという空想については、あからさまな自慰を伴っていることから、父親との愛憎の葛藤を示すエピソードとして用いられている。こうした父親との関係は公刊された論文ではエディプス理論から考察されており、論述の中核をなしている。ただ一方で、「父親の自分勝手な性格」(#37)が省略されていたり、「父親の性格」について肯定的に示唆されている点など、その内容は取捨選択されており、がさつで荒っぽいが率直で気立てがよいという肯定的な父親像をフロイトは描きだそうとしているようにも思われる。

最後に、変更点としては、実名が匿名に変更されたものがある（「ザボルスキー家→親戚」(#30)、「ランツァー家のお針子」→「ハイ・ミス」(#38)）。この変更は当然、フロイトが患者のプライバシーを配慮したものだろう。

また、フロイトの解釈により公刊された論文の表現が強調された点がある。たとえば#30のセッションでは、フロイトの娘の両眼が「二つの汚物のしみに置き換わっている姿」を患者がみたとされているが、公刊された論文では「二つの大便を付けて」とされている。これは「便=金」であり、患者が金目当てにフロイトの娘との結婚を狙っているという解釈を際立たせるために、汚物のしみが大便に誇張されたのかもしれない。#35のセッションでは、ねずみ

のような動物が父親の墓のそばを走りすぎるのを見て、「父親のところに食事をしにやってくるらしい」と患者が推測したとされているが、公刊された論文では「ちょうど父親の死体を食いあさってきたところだと思った」とされている。一種フロイトの想像力の産物といえるが、患者の父親に対する憎悪のエピソードとしてフロイトが理解したいがために、ネガティブなイメージが付与されたようにも思われる。

注

- 1) Sigmund Freud Originalnotizen zu einem Fall von Zwangsneurose. *Gesammelte Werke Nachtragsband Texte aus den Jahren 1885-1938*, S. Fischer Verlag, 1987, S. 505-569.
- 2) *L'Homme aux rats Journal d'une analyse* (Text allemande reproduit et établi, introduction, traduction, note et commentaire par Elza Ribeiro Hawelka), P. U. F, 4e édition: 1994
- 3) Freud, S. (1909): Adendum: Original Record of The Case. Translated by Strachey, J. & A. *The Standard Edition of Psychological Works of Sigmund Freud Vol. X*, 255-318.
- 4) 先に述べたように、北山(監訳)・高橋(訳)も邦訳の脚注のなかでセッションの内容と公刊された論文との対応関係について指摘している。とくに第7セッションまでの邦訳の脚注には、公刊された論文にも内容が逐語的に再現されていることもあり、両者の対応関係については詳しく言及されている。ただしあくまでも邦訳作業の過程のなかで行われているため、第8セッション以降、全体のセッションを通じて両者の対応関係がどのようなものか論じられるまでには至っていない。

文献

- 「ねずみ男」精神分析の記録 北山修(監訳) 高橋義人(訳) (2006) 人文書院, 8-153
- 強迫神経症の一症例に関する考察 小此木啓吾(訳) (1983) フロイト著作集9, 人文書院, 213-282
- 佐藤淳一・鏑幹八郎(2003): フロイトの症例「ねずみ男」に関する考察 (I) - 診療記録の翻訳の

- 試みおよび公刊された論文との対比. 京都文教大学大学院臨床心理研究紀要／研究編, 創刊号, 117-130.
- 佐藤淳一・鏑幹八郎 (2004a) : フロイトの症例「ねずみ男」に関する考察 (Ⅱ) - 診療記録の翻訳の試みおよび公刊された論文との対比. 京都文教大学大学院臨床心理学研究科紀要／研究編, 2, 115-124.
- 佐藤淳一・鏑幹八郎 (2004b) : フロイトの症例「ねずみ男」に関する考察 (Ⅲ) - 診療記録の翻訳の試みおよび公刊された論文との対比. 京都文教大学大学院臨床心理学研究科紀要／研究編, 2, 125-133.
- 鏑幹八郎・佐藤淳一 (2005a) : フロイトの症例「ねずみ男」に関する考察 (Ⅳ) - 診療記録の翻訳の試みおよび公刊された論文との対比. 京都文教大学大学院臨床心理学研究科紀要／研究編, 3, 65-73.
- 鏑幹八郎・佐藤淳一 (2005b) : フロイトの症例「ねずみ男」に関する考察 (Ⅴ) - 診療記録の翻訳の試みおよび公刊された論文との対比. 京都文教大学大学院臨床心理学研究科紀要／研究編, 3, 75-84.